

結果構文の翻訳から分かること

—— push the door open を題材に ——

出水孝典

Abstract

As is well known to linguists, when describing both manner and result in a clause, English uses resultative constructions whereas Japanese forms complex verbs. In French, however, both of these strategies are generally unavailable. In this paper, we examine how the English resultative construction “push the door open” is translated into French, as well as into Japanese. We demonstrate that the event “push the door open” is expressed, in most cases in French and sometimes in Japanese, by a manner verb alone semantically equivalent to the English verb “push”, and the resultant state “open” is inferred from the context. In addition, we point out that lexical semantics advanced by Beth Levin and Malka Rappaport Hovav has no theoretical apparatus to deal with this sort of inference, and that we have to propose a mechanism by which lexically inferred semantic elements are analyzed.*

キーワード：様態・結果の相補性，結果構文，複合動詞，推論

1. はじめに

「ドアを押すことによって開いた状態にする」という状況を1つの節によって表す場合に、日英語で違いが見られることは、これまでも広く論じられてきた。影山（1996: 208）は、日本語の「ドアを押し開けた」、英語の *He pushed the door open.* という例を挙げた上で、その違いを説明している。日本語では V1+V2 型の複合動詞が用いられ、V1 の「押す」が行為の様態、V2 の「開ける」が結果として生じる状態変化を表す。それに対して、英語では、日本語の V1 に対応する部分が定動詞 *pushed* となり、V2 に相当する部分は、形容詞 *open* のような二次述語になる。結果構文（*resultative construction*）と呼ばれる形式を用いる。¹⁾

しかしながら、同じ状況を表すのに、「開ける」という部分を明示せず、「ドアを押す」ことのみを描写した以下のような例が、日本語小説に散見される。

（1）津久見伸助は約束の時刻に、喫茶店「赤門」のドアを押して中にはいった。

（中町信（2004）『模倣の殺意』東京：東京創元社 . p. 50）

この場合、「ドアを押して」の部分が「ドアを押し開けて」を実質的に意味しているのだが、な

ぜこのような形式が用いられるのか。また、日本語以外にも、このような表し方をする言語はあるのだろうか。

本稿では、英語の小説に見られる、動詞 push が目的語に名詞 door を取った例をそのフランス語訳・日本語訳と比較・検討することで、(1) のような描写の仕方を、様態・結果の相補性という点から見ていく。このような例は、一見、様態・結果の相補性に違反するように思えるが、実際には違反していないこと、日本語よりもフランス語の方がこの種の表現方法が発達しているが、このような違いを、語彙意味論の理論内に位置づけるのは困難であることを主張する。

2. 様態と結果の相補性

冒頭で、日本語の複合動詞と英語の結果構文の例を瞥見したが、日本語の複合動詞の V1 である「押す」と V2 である「開ける」の間には、動詞が語彙化している意味要素の点で重要な違いがある。さらに、同じ違いが、英語の動詞 push と、形容詞 open が表す状態を引き起こすことを意味する動詞 open の間にも見られる。

語彙意味論の研究者として名高い Beth Levin と Malka Rappaport Hovav は、一連の論文で、非状態動詞（動作動詞）が語彙固有の意味として必然的に含む意味要素には、様態（どのようにするのか）と結果（どうなるのか）の2種類しかなく、動作動詞はすべて、様態・結果のいずれか一方の意味要素のみを語彙化し、もう一方の意味要素に関しては未指定であるという考え方を提示してきた。これは Levin and Rappaport Hovav (2013: 50) で様態・結果の相補性 (manner/result complementarity) として定式化されている。²⁾ これに従うと、動作動詞は以下の2種類のいずれかであるということになる。

	意味的特徴	動詞の例
様態動詞 (manner verb)	どのようにするのか（様態）を語彙化しているが、どうなるのか（結果）に関しては未指定	hit, kick, pour, shake, shovel, slap, wipe,...
結果動詞 (result verb)	どうなるのか（結果）を語彙化しているが、どのようにするのか（様態）に関しては未指定	break, crack, fill, empty, melt, open, shatter,...

(cf. Rappaport Hovav and Levin 1998: 100-101, Levin and Rappaport Hovav 2013: 52)

「押す」や push は、「手前から向こうに力を加える」という様態を表すが、その結果どうなるのかについては何も言っていないので様態動詞、「開ける」や open は、どのようにして開けるのかという様態については何も言っておらず、開いた状態になるという結果だけを表しているので結果動詞だということになる。

動詞 push が様態のみを表し、結果が未指定であることは、Levin と Rappaport Hovav が様態動詞・結果動詞という分類を提示する以前にも、言及されてきた事実である。例えば、Jackendoff (1990: 132) は、push や pull のような動詞が、「結果が確定されていない力の適用」

という使役の意味要素をもつとしており、「ドアが動いたか否か」を推論することはできないとしている。

- (2) Amy pushed/pulled (on) the door as hard as she could, {and it finally opened./ but it wouldn't budge.} (Jackendoff 1990: 133)

この例から明らかのように、pushed the doorと言っただけでは、ドアが開いた場合も開かなかった場合も、いずれもありうるということである。

3. 結果構文と複合動詞の存在意義

前節で見た様態・結果の相補性が成立するならば、単一の動詞は様態・結果のいずれか一方しか表すことができないことになる。一般に1つの節には述語動詞が1つなので、本来ならば、英語でも日本語でも、1つの節で表現可能なのは様態・結果のいずれか一方のみだということになる。しかしながら、結果構文や複合動詞のような特別な形式を用いることで、1つの節内で、様態・結果の両方を言語化することが可能となる。³⁾

様態・結果を1つの節内で同時に言語化する形式が、日本語と英語で異なるという事実を、影山 (1996) ではさらに広い通言語的な見方と結びつけ、日本語 vs 英語という対立を、アジア言語 vs ヨーロッパ言語という対立に拡大解釈し、以下のように述べている。

- (3) 日本語は、アジアの多くの言語と同じように、「押し開ける、揺り起こす、なぐり倒す、蹴り殺す」のように、2つの動詞を組み合わせた複合動詞を豊富に備えているが、英語では、ヨーロッパ言語の特徴として基本的にこの形式の複合動詞は存在せず、*shoot-kill や *push-fall のような表現は使えない。(影山 1996: 207)

したがって、英語を含めたヨーロッパの言語では、日本語のような複合動詞を作ることができないということである。とは言うものの、ヨーロッパ言語なら、英語同様に結果構文を作れるのかというと、そうでもない。

英語と同じヨーロッパ言語であっても、Washio (1997: 28) が *Jean a martelé le métal plat. 'John hammered the metal flat.', *J'ai peint le mur rouge. 'I painted the wall red.' のような例を挙げて説明しているように、フランス語、イタリア語などのロマンス語では、英語のような結果構文を用いることは、一般に不可能である。⁴⁾ さらに、これらの言語はヨーロッパ言語であるが故に、日本語のような複合動詞を用いることもできない。

では、英語の小説で、push the door open のような結果構文が用いられている場合、フランス語の翻訳ではどのような処理がなされているのだろうか。以下では日本語訳と合わせてそれを見ていく。

4. 結果構文の翻訳から分かること

議論を具体的にするために、本稿では、英語で書かれた小説7冊から、動詞 *open* が目的語として名詞 *door* を取っている例を収集し、それを出版されているフランス語訳、日本語訳と比較し、様態・結果がどのように表現されているのかを検討する。⁵⁾

動詞 *open* が目的語として名詞 *door* を取っているものは、全部で16例あった。しかもこれらの例はいずれも、「ドアを押すことによって開いた状態にする」という状況を表しているものだった。「ドアを押す」(*push the door*) という場合、通例「開ける」ためだと考えられるので、このような結果になったことは納得がゆく。16例のうち、二次述語なしで(つまり *push the door* のような形で)用いられている例が2例、*back, inward, outward* という押す方向に関する不変化詞を伴った例がそれぞれ1例ずつあったが、それ以外の11例はすべて、*push* が二次述語として形容詞 *open* を伴った結果構文であった。このことから、英語ではこの種の状況を表す場合、形容詞 *open* を伴う結果構文が頻用されることが明らかとなった。

次に、日本語訳とフランス語訳について述べていく。英語の原文で結果構文となっている11例の日本語訳を見ていくと、そのうち9例が、「押し開ける」という複合動詞を用いて、様態と結果の両方を言語化する形で翻訳していることが明らかとなった。それ以外の2例は、「ドアを押した」のように様態のみを訳出したものが1例、「ドアを開けた」のように結果のみを訳出したものが1例であった。それに対して、興味深いことに、フランス語訳では、英語の結果構文11例のうち7例が、「押す」を意味する動詞 *pousser* のみを用いて様態だけを言語化した形で翻訳されていた。また2例が「開ける」という結果を表す動詞 *ouvrir* だけを使った翻訳となっていた。それ以外は、フランス語訳で表現そのものが省略されている例が1例、動詞は結果を表す *ouvrir* を使いながらも前置詞句による副詞的修飾語を用いて様態を表した例が1例であった。

日本語訳とフランス語訳の翻訳法を比較して分かるのは、英語と同じような結果構文はなくても、その代わりとなる複合動詞をもつ日本語へと訳す場合、やはり原文に含まれる様態・結果を両方訳出するケースが多いのに対して、結果構文も複合動詞も一般的ではないフランス語へと翻訳する場合、結果を読者の推論にまかせて、様態のみを言語化することが多いということである。このような日本語訳とフランス語訳の違いを典型的に表す具体例を1つ、英語原文・フランス語訳・日本語訳の順で挙げておこう。

- (4) 'This time the door was ajar. I *pushed* it [i.e. the door] *open* and went up the first two flights, calling out.'

(P. D. James. 2006. *The Lighthouse*. London: Penguin Books, p. 220)

«Cette fois, la porte était entrouverte. Je l'ai *poussée*,
 this time the door was half-open I it-have *pushed*
 et suis monté jusqu'au deuxième niveau en appelant.
 and is gone-up as-far-as-the second story calling

(Translated by Odile Demange. 2006. *Le Phare*. Paris: Librairie Arthème Fayard, p. 243)

'This time, the door was ajar. I *pushed* it, and went up until the second story, calling.'

「灯台のドアは今度は少し開いていました。私はさらに押し開けて、階段を二つ昇って声をかけました」

（青木久恵（訳）2007.『灯台』東京：早川書房，p. 193）

この例では、灯台のドアを押し開けて内部に入り、階段を上ったことが描写されている。英語原文に見られる結果構文 *pushed it open* が、日本語訳では「押し開けて」と複合動詞を用いて様態・結果の両方を訳出した形になっているのに対して、フランス語訳では *l'ai poussée* 「それを押した」と様態のみを表す形になっていることが分かる。

5. 様態から推論される結果

では、次例のフランス語訳と日本語訳、および冒頭の (1) に見られるように、「ドアを押すことによって開いた状態にする」状況を、「ドアを押す」とだけ表現することが可能となるのはなぜだろうか。様態・結果の相補性から考えれば、動詞「押す」や *pousser* はあくまで、「手前から向こうに力を加える」という様態しか表さないはずである。それにもかかわらず、「ドアを開く」という結果が読み取れる。

(5) He *pushed open* the door and found himself in a small barrack bedroom ...

(John le Carré. 2009. *The Spy Who Came in from the Cold*. London: Hodder & Stoughton Ltd, p. 129)

Leamas *poussa* la porte et se trouva dans une petite
Leamas *pushed* the door and himself found in a small
chambre de caserne.
bedroom of barracks

(Translated by Marcel Duhamel and Henri Robillot. 1964. *L'Espion qui Venait du Froid*. Paris: Éditions Gallimard, p. 171)

'Leamas pushed the door and found himself in a small bedroom of barracks.'

ドアをおしてみると、兵営内を連想させる手狭な寝室で…

（宇野利泰（訳）1978.『寒い国から帰ってきたスパイ』東京：早川書房，p. 171）

このように、様態動詞からある種の典型的な結果が推論されることについては、様態・結果の相補性を提唱している Levin と Rappaport Hovav も次のように述べている。

(6) ... although a floor is typically swept in order to remove dirt and debris, a floor that is swept need not end up being clean. Although a hearer will infer that a swept floor is a clean floor because the conventional goal of sweeping is to clean a floor, there is nothing contradictory in saying *Tracy just swept the floor, but there are still crumbs on it*.

(Rappaport Hovav and Levin 1998: 101)

つまり、「床を掃く」(sweep the floor) 目的は一般に、「床をきれいにする」(clean a floor) ことなので、聞き手はふつう「掃かれた床」は「きれいな床」だと推論するということである。ただし、Tracy just swept the floor, but there are still crumbs on it. のように推論される結果を否定できることから明らかなように、「床をきれいにする」という意味は、「床を掃く」に含まれている訳ではない。同様のことが「ドアを押す」(push the door) にも当てはまる。「ドアを押す」目的は一般に、以下の仏和辞典の記述からも分かるように、「ドアを開ける」(open the door) こと(あるいは場合によっては「ドアを閉める」(close the door) こと)なので、聞き手はふつう「ドアを押す」と「ドアは開く」と推論する訳である。

このような「ドアを押す」という様態から生じる「ドアを開ける」という結果の推論は、結果構文も複合動詞も有さないフランス語のような言語においては、目的語が名詞 *porte* である場合、かなり強く感じられるようであり、仏和辞書の記述で、このような推論も含めた日本語訳が提示されているものもある。

(7) pousser [pu · se] 動

1. N₀ [人] ~ N₁ [物・人] (+場所) (移動させるように) 押す, (…まで) 押して行く
[…]

◇ ~ une porte ドアを押して開ける [閉める] ⁶⁾

(『白水社ラールス仏和辞典』)

また、以下のフランス語小説からの実例に見られるように、フランス語ではしばしば、「ドアを押すことによって開いた状態にする」状況を表すのに、本来は様態のみを表す *pousser la porte* が用いられる。

(8) Non, il en est incapable, jamais il ne pourra seulement
no he of-it is incapable never he not will-can even
monter les quatre marches, *pousser* la porte, entrer, non, jamais.
go-up the four steps *push* the door enter no never

(Pierre Lemaitre. 2011. *Alex*. Paris: Éditions Albin Michel, p. 179)

'No, he is unable to do so, never, he will not even be able to go up the four steps, *push* the door, enter, no, never.'

No, he simply cannot, he would not even be able to climb the four steps, *push open* the door and step inside... Never.

(Translated by Frank Wynne. 2013. *Alex*. London: MacLehose Press, p. 154)

あの四段を上がり、扉を押し開け、なかに入ることはできない。金輪際できない。

(橘明美 (訳) 2014. 『その女アレックス』東京: 文藝春秋, p. 198)

これらの例では、英語訳と日本語訳において、「開ける」という結果が明示的に言語化されており、

フランス語原文でも通例、「開ける」という部分が推論によって読み込まれることが分かる。

複合動詞が利用可能な日本語においても、冒頭の(1)で見たように、同様の表現方法は可能なようである。ただし、4節で述べた日本語訳とフランス語訳の違いから分かるように、この種の表現法は、フランス語の方が圧倒的に多く用いられる。これは、様態・結果の両方を1つの節で表す、結果構文や複合動詞のような表現方法をもたないフランス語において、*pousser la porte*「ドアを押す」という様態動詞を用いた表現が、結果を推論に委ねて表す慣用的な表現方法として確立されているためだと考えられる。

ただし、このように結果の推論が強く、この種の言い方が頻用されるフランス語においても、英語の(2)同様に、結果が生じたことを否定する次のような言い方は可能である。

(9) J'ai *poussé* la porte mais elle est restée fermée.
I have *pushed* the door but it is remained closed

(Marcella Ottolenghi Buxbaum. 2001. *1001 Most Useful French Words*.
New York: Dover Publications. p. 38)

'I *pushed* the door but it remained closed.'

したがって、「ドアを開ける」という結果が推論されることが多いものの、あくまでもこれは否定できる推論であって、*pousser la porte* そのものの意味ではないということである。したがって、様態・結果の相補性の反例とはならない。そこからさらに、(7)の「ドアを押して開ける [閉める]」のような日本語訳は行き過ぎで、むしろ「ドアを開けようと押す」くらいの方が妥当だと言えるかもしれない。

6. おわりに

様態・結果の相補性は、Demizu (2015)でも援用している、LevinとRappaport Hovavによる語彙意味論の根幹をなす概念である。しかしながら、実際の言語表現を見ていくと、様態・結果の相補性に違反するように見えるものが存在する。本稿では、「ドアを押し開ける」例を取り上げ、日本語の「ドアを押す」、フランス語の*pousser la porte*において、一見「開ける」という結果が存在するように思われる例を取り上げ、様態からの一般的な解釈に基づく推論にすぎないことを主張した。現時点でのLevinとRappaport Hovavによるモデルでは、この種の推論は、語彙化される要素ではないとされ、扱うことができない。ただし、フランス語の*pousser la porte*のように、結果がかなり確立された意味となっている場合、完全に無視してもよいのかという疑問が残る。今後は、この種の語彙的に推論される結果（および予備段階と呼ばれる、語彙的に推論される様態）をうまく扱う仕組みを考えていく必要があるだろう。

また、このような表現方法の違いは、それぞれの言語が、それぞれの場面で、どこまでを言語化し、どこまでを推論に委ねるのかという、児玉(2013)が次のように述べているもっと大きな問題とも関連していると考えられる。

- (10) 一連の文は事態の状況・背景・事態の推移・因果関係・詳述・対比・並列など、多様な記述法に従って、あるいは何を語り何を語らないかについて個別社会の時代精神や言説の秩序に沿って展開する。展開の仕方は話し手がどのような意味世界を誰に向かって語るかによって違って来る。(児玉 2013: 96-97)

注

* 児玉先生には1993年4月に立命館大学文学部のゼミに入って以来、2014年2月に博士の学位を取得するまで、本当に色々な面でお世話になりました。大学を定年で辞められた後も、六甲英語学研究会に出席され、筆者の発表に対していつもコメントや励ましを下さいました。Demizu (2015) として出版された博士論文で取り上げた事例も、その多くが児玉先生の大学院の授業で学んだ内容でした。今後とも、その学恩に少しでも報いることのできるような研究成果を上げてゆくよう努力したいと思います。

- 1) 複合動詞や結果構文の詳細については、影山 (1996: 207-273, 1999: 188-216), 影山 (編) (2001: 154-180, 270-275) などを参照されたい。
- 2) Goldberg (2010: 46-50) のように、様態・結果の相補性を否定する見解も存在するが、本稿では相補性が成立するものとして議論を進める。
- 3) ただし、このような特別な形式を用いる場合、影山 (1996: 207-273), 影山・由本 (1997: 67-87), Rappaport Hovav and Levin (1998: 114-123) などで詳述されているように、複数の事象を合成するという操作を伴うし、どのような事象同士でも合成できるというわけではない。また、どのような統語構造に対応するどのような仕組みが利用可能なのかという点で、言語ごとに差異が見られることは、これまでもたびたび議論されてきた。
- 4) このような英語とロマンス語の間に見られる様態・結果の表現方法の違いについては、衛星枠付け言語 vs 動詞枠付け言語という二分法と関連づける形で、英語とスペイン語を例に取って Talmy (2000: 227) も言及している。
- 5) 調査対象とした小説7冊とは、Jeffrey Archer. *Shall We Tell the President?* London: Pan Books, 2003., Dan Brown. *Angels and Demons*. New York: Pocket Books, 2001., Graham Greene. *Our Man in Havana*. London: William Heinemann and the Bodley Head, 1970., P. D. James. *The Lighthouse*. London: Penguin Books, 2006., John le Carré. *The Spy Who Came in from the Cold*. London: Hodder & Stoughton Ltd, 2009., Sidney Sheldon. *A Stranger in the Mirror*. New York: Grand Central Publishing, 2005., Irving Wallace. *The Second Lady*. New York: New American Library, 1980. である。
- 6) 筆者が収集した英語小説のフランス語訳や、フランス語小説からの事例には、ドアを押して閉める意味で *pousser la porte* を用いているものは見当たらなかった。おそらくこのフレーズは「ドアを押し開ける」意味で用いる方が一般的だと考えられるが、これに関してはさらに調べる必要がある。

参考文献

- Demizu, Takanori (2015) *Lexicalization Typology and Event Structure Templates: Toward Isomorphic Mapping between Macro-event and Syntactic Structures*, Tokyo: Kaitakusha.
- Goldberg, Adele E. (2010) "Verbs, Constructions, and Semantic Frames," In: Malka Rappaport Hovav, Edit Doron, and Ivy Sichel (eds.) *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*, 39-58. Oxford: Oxford University Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京：くろしお出版。
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』(日英語対照による英語学演習シリーズ2) 東京：くろしお出版。

- 影山太郎（編）（2001）『日英対照 動詞の意味と構文』東京：大修館書店。
- 影山太郎・由本陽子（1997）『語形成と概念構造』東京：研究社。
- 児玉徳美（2013）『ことばと意味』東京：開拓社。
- Levin, Beth. and Malka Rappaport Hovav（2013）“Lexicalized Meaning and Manner/Result Complementarity,” In: Boban Arsenijević, Berit Gehrke., and Rafael Marín (eds.) *Studies in the Composition and Decomposition of Event Predicates*, 49-70. Dordrecht: Springer.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin（1998）“Building Verb Meanings,” In: Miriam Butt and Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 97-134. Stanford, California: CSLI Publications.
- Talmy, Leonard（2000）*Toward a Cognitive Semantics : Volume II*, Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Washio, Ryuichi（1997）“Resultatives, Compositionality and Language Variation,” *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.

